羽田富之郎輯
山田戯二郎画

天幸多侠秀傳

大橋堂梓

A477
南町

古人のいへらく愚なる者ハ生外と愚鈍ふ養ことをかへつて其身を保こと安く智者ハ

かくつく智ふ亡宜るるう子こゝふ大阪高麗橋一丁目一番地藤田傳三郎が家景を尋るふ折々夜仁のころ二十八天下の一統後陽にこを名を覚かせし山名宗全ふ麼子山名成定ふぞありける足利高氏さいせんの後毛利元就ふ▲

▲併ぜられしが成定末の晴堅ふ使ひ安藝の宮島●

●ふて再び毛利と戦ひしが軍利あらじて

<48-8250>

つぎ
終に討死せり其子同名多喜の助は弱年にして武備を出張するの力なく民家にくだりてよとを安く暮さんやと山陽道長門の国阿武郡片側町といふ所に住し草切たがやして妻子をやしなふよりて先祖の姓をすてゝくりめとよりふじたの姓となれば
流石におなじおふなれも呆
所の者も敬まて藤田さまと称しつ郷士のごとくおもひけり去年より
藤田

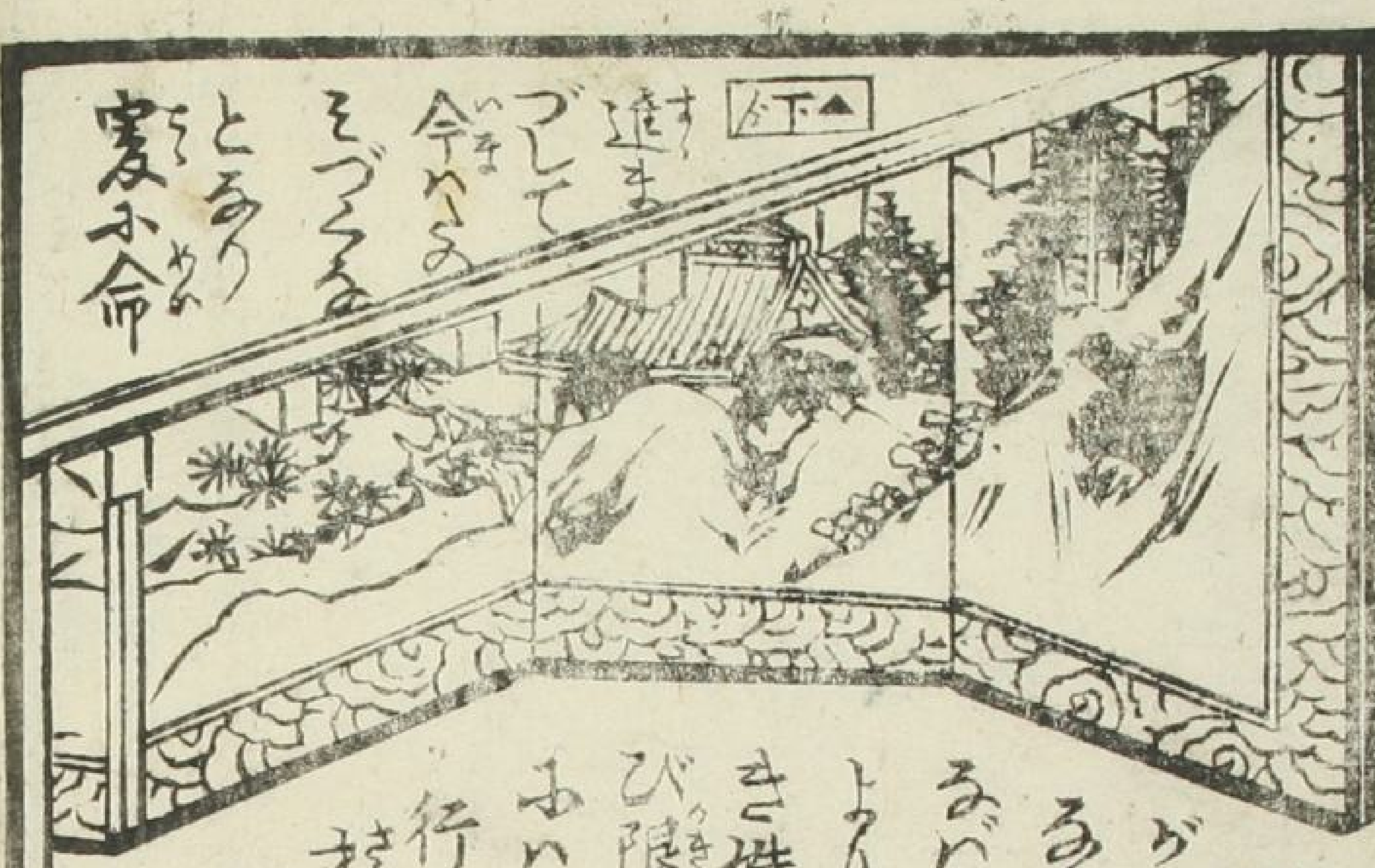
さらになしたと姓をあらため子孫豊栄楽のありやうなきバ太ひに田地でんくさをのとやなかなかくらしける
白称関守なくして春秋をとうかさねてと二百八十餘年某が多喜の助より十一代の孫藤田半左衛門へ豊作を摩し今酒となりを
次へ

▲時ハ何国く出行こと毎夜ふ
兄申かハ父半左エ門いぶかしく
おもひけん一日伝三郎が行
洺を見へがくれふ志
そひしが伝三郎ハ
かくとも志らず所ふ
ちかき面のけやあふ
てけ入て暫ま
縄手綱をかけ
山やをかけ廻り
一ろ術をんつんる
子図

つゞき
永楽臣夫婦がなかふ五人の
男子ありしが惣領ハ
幼き頃より身亡て
二男鹿太郎三男それがし
四男伝三郎ハ天保十二年
丑の六月十二日ふ出産なしぬきやうだい
皆賢なりといへどもそれがなかにも伝三郎ハ
いとけなき頃より相明令利ふしてもくんの
書をこのミ又ハ武術ふ心を
もたね己書くのひま
ある▲

図その子き
ことひてう
の如く
又短づ
をたづさん
空飛とりを
討かとぞふ
百発百
中なるを
かくしとせつ
半左エつ
木のまより

次へ



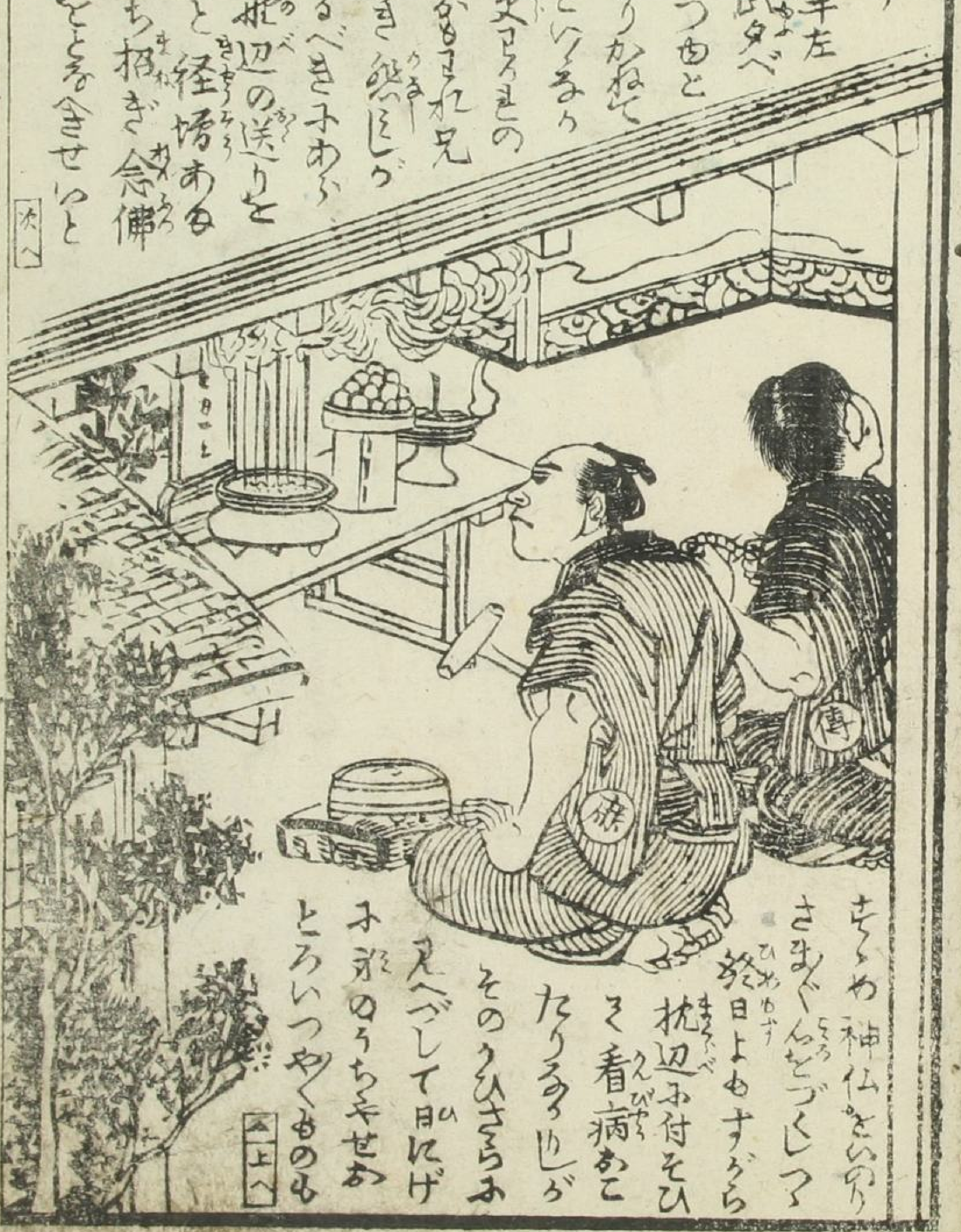
つゞき　かいまみて大ひに祝び我酒製をひきつゞく楽とそれども元より高人の
父にあらず先祖ハよしある山名の末葉我四人の
男子を持りいづれも武門に仕へんと日比より思ひ
が今伝三郎が所行をみるに末たのもしき者なれ
ならバ尚此のちもよき師をえらミ武士の道をおしへ
なバ我家をもひきおこすべき人よもこそあらめんとこれ
より継師を尋ね求め伝三郎を導びくに元より賢
き性なれバ一を聞て十を知り上達するにしたがひて父の悦
び限りなく伝三郎が成長するを由びあり数へて待み
には　日千秋の思ひぞある待身にハつらきとしつきながら
行ひまに冥するなく星霜うつりて伝三郎ハ十七
才となりぬ此の父半左衛門ハふとかぜのこゝちより
老病おいもつまきさまくに附け云ば兄弟とも
大ひにおどろき　医師を尋ね良薬を

進まづして今やるにもそづくるとあり実に命

▲下へ

さらや神仏をいのり
さまぐ心をつくして
終日よもすがら
枕辺に付そひ
て看病なこ
たりなりしが
そのかひさらに
なくして日にけ
に形のうちやせお
とろいつやくものも

△上へ



数限り
あるや半左
衛門ハ此夕べ
朝日のつゆと
消にけりかねて
覚悟といひなが
らいま更なるの
よふになき兄
弟ひなげき悲しう
さてあるべきにあら
ざれバ北辺の送りを
なさんと経壇あらた
にたどうち招き念仏
すへんとなさせしと

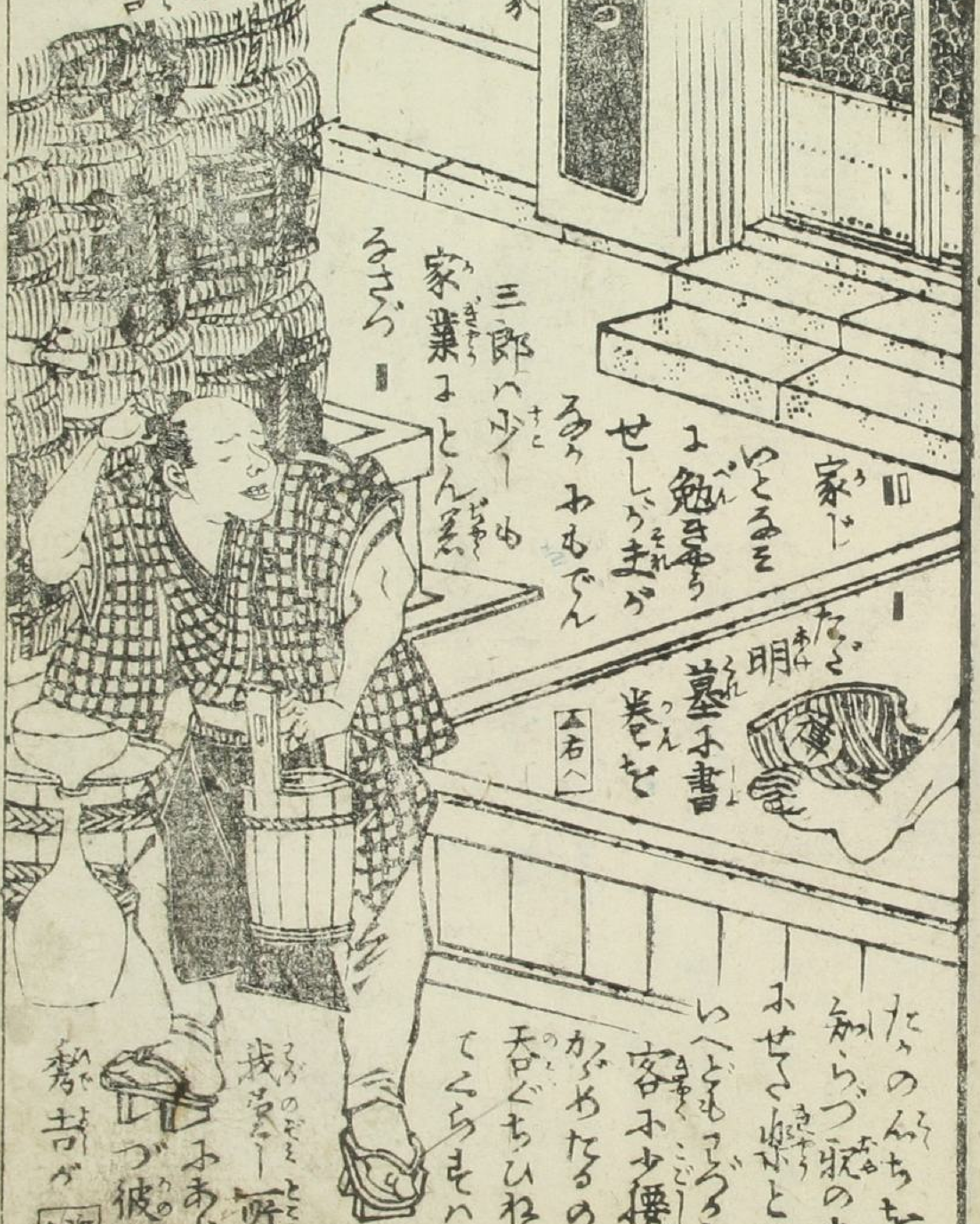
次へ

つぎ

ねんごろに父が亡がらをおくく墓所へ葬りて、扨兄弟の輩はもおこりて後父が遺言の如く二男鹿太

▲左へ

けんし又をこーくハ酒をくらひ念佛へひる
ねに時うんをうつせしが兄鹿太郎ハ大いにいかりきせるのうくのせつかんにだましもうてさとせども傳三郎いこれをきうづんのうちにあさ笑ひ運雀何ぞましくま



郎をおして家とく継ぞくなし父が家業を受つぎく兄弟ともに心を合せ

三 家だいとなみに勉強せしが其がなかにも傳

一 たき明墓に書巻を

▲右へ

三郎ハ少しも家業にとん着なく

たゝのんちを知らづ財の志本せさ楽とへいへどもたらろ子客に少々をかゝめたるの呑ぐちひねりてくらもへ我家し一所来まで づ彼秀吉が

次へ

「つゞき」口号に「うへ見えもへおよばぬことのみなりけり笠ぬぎ捨よ己が心よト吟じながらも風なるが牛ハ然ひら鼻面をとられもやら彼君ありさしくひつ夫より成出げに日本のぬしとハなりぬ我斯近にあらずとも今大丈夫と生まれて此まゝ民家にくち果んハいとんど遺憾の極りなりハなりもして

【上左】御両親でさへおやの其さゞ波が行末あんじ玉ひるんだしが諸行をつらく見るによきことに随ひるべ家ともかくも器量あるとも又悪盗に入時ハ藤田の家をも例ひあり我身に教訓せようしと御言状の耳ねに残りまつこの如く云さとされ則ち我が云ぞにあらずご是ゆう親のいましめるをも更に汝のうちひつハ最早此家になくこととなしづ親にかゝりて此兄が七生迄の勘当なりと云放せしを大ひに笑ひどぜう鯨のなりきを知らぬ井蛙ハ大海の深さを知らで我おもひ立しことにおもひたとひしく困苦 ⊠あと

大都會の良津に奮發なし一大業を創立なし天下の宝を引まとめんと心の内に思ひを廻らし千廣の海をも千が如く天下も呑んづ色を秘おき我誓て此くなり願望成就ならづんバ生て再び兄君に面をいかでかあはさんやと心の内に思へバこそ兄鹿太郎がいけんをも聞ず家業を疎こしゝが兄鹿太郎ハ怒りに絶もせんトいふなきハこそかく迄に天魔の己にみ入ぞや

此身を終るとも思ひ止るまじきぞ今勘当とのたまふ◐

◐こそ我身の願ひ所に⊠

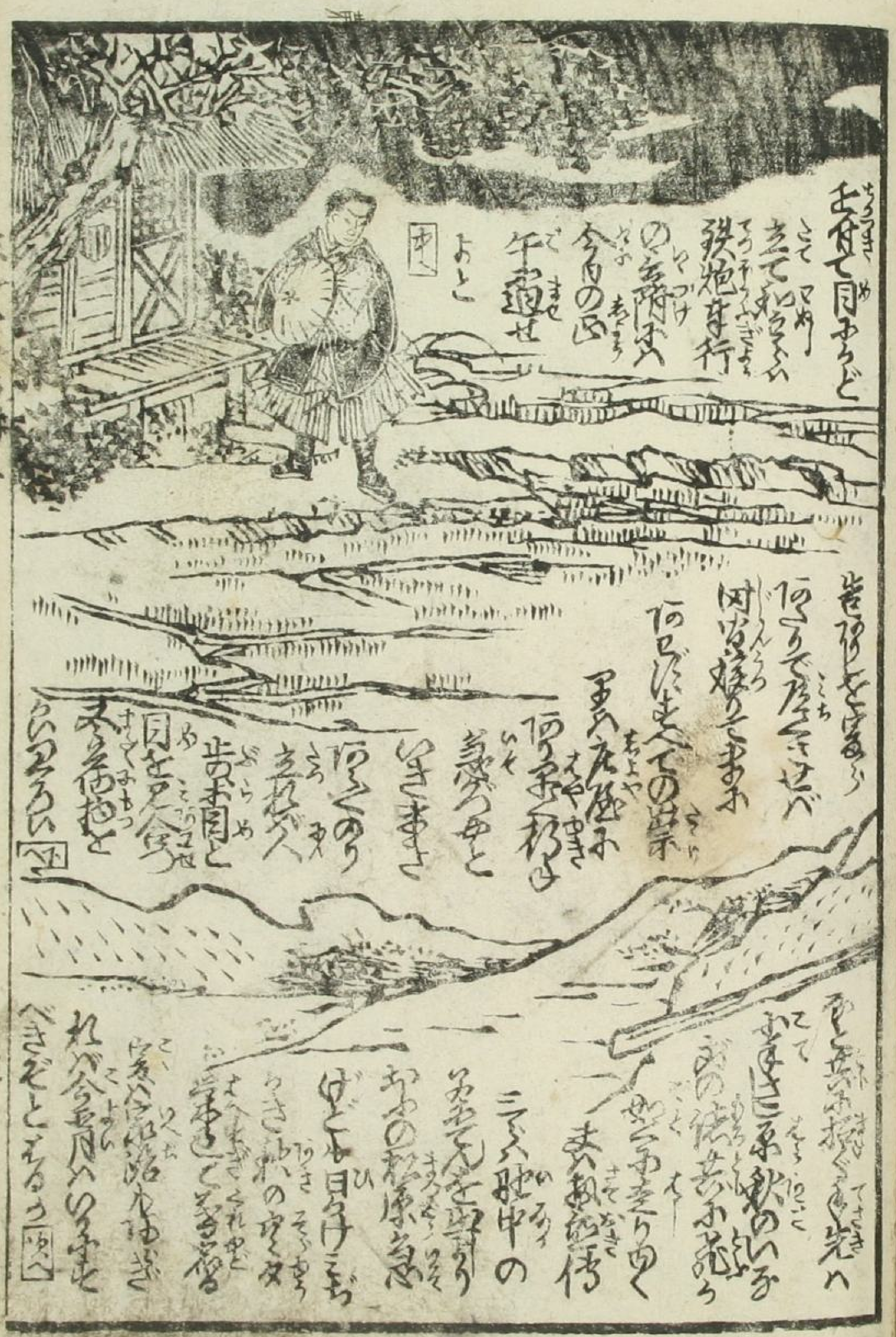
なし身に一毛の貯へなく運然として出行し傳三郎が此行先いかなることに成行やその又次の巻に詳分解し

東京浅草區
[illegible]馬道三丁目
二十番地
大橋堂 児玉弥七板

由井民部
後世
信義の
正雪の

三の教訓

[illegible]の
急がれて[illegible]の
遠[illegible]中の
一里松[illegible]
[illegible]三郎[illegible]
百[illegible]
[illegible]
土用[illegible]早南
[illegible]
下へ
[illegible]



𛁈君こそ御落胤と
とくより西差なりと
月日のみ出して居れバ
かの祖ふ深しこる
弟子の
はなし

ぼう連の仲を
目けち行まふに
あ人ハだんびら
ぬき二人の
あんの中へ

まつ中くを
けれハひとす
ハ小子け小ひそ
みるる傳子の
か子の脇ぶ上え
からのいかれんど
ざまみて緒たる
白に被ぬぬる
通礼矢びざう
き少ばけ様に
アと左之勝のて
べど二人の山識
かさまげ走てや
ゆくくりと

△旅を手ぎ入ぶんと
するを伝ふハ二人の
襟をつかい起こ三
写すり投付れバ
七丈の切付る
とほりの譜
逆海にいく
御茶茶所
の方さで
それ故両つて
行て行ぞそ
是ハ落胤信二ふと
云たる子ふらふ三人
小性をあのいたにの

いぶし
見れ出ぬ
ら色まが
指をと
の声に

てうさいち
二六大地を
手傳し

次 僕は西国浪人者
さるゆゑに拙者なくひとの
猶六郎中お事ある旅宿が
懐中乏しくて浪人ぞん
がいさぶしのさのいばかりさぞ
熊谷親子今大坂表條頼み
おとふ中老弟ひぞく公平を助け
たまへれと深れバ当国へ来つこと
吾らく浪居の
そぎさとはし
一毛をきむさ
ろうも巨万
の金をとりまも
見知盗函のひと
上 それやしぶつくわらむ
きそうとまたる公平を
四方に評判その時
西念より兄およと
侍ニ人三人わくと別
れ先立その代表
の熊谷父子を
深れば近き山
口の城主
兼て親密
の藩士まで
典膳年全
と知りひとし折よく
此日は此宿所へきたさい
下 つおは作りやがりて小手に
かるくびく敵大のふ
加わ礼まと
めんせんと備へて心を
定あるにまかせ待
兵衛年人は気抜
ならくやて此方ハ
一別こまやの所のさの
ことをし兄卯を出
の所存ハ一公の意味
方へ入とせりや行ゆかむ
くさまましと云めてあき
まさき不覚入ハ侍ら
小又館中おとなまを
れて年全とかけ寅
強義論にまかせ
エく 次の三編にくはしく

東京浅草區
愛喜堂 馬道三丁目 壹番地 三集
大橋堂 児玉弥七板

再び説く宮本家因幡ハ山口の
浦士興播隼人をともひ
志が旧友の来りしを祝び樓に
誘ひて旅中の
うさをなぐさむ
再び佳肴
珍味をつくし
三盃をすゝめ
まづ隼人の盃にも
ほと隼人の盃をさし
おかこひ盃を

とり交はして盃
互に追し酒
たけなはなる
みぎりとき
隼人は幕
府の政
を聞に及び
蔭の政事を論じて答る
やう幕府は日本の大将
しかれとも関東の
諸侯へ三百有余
年の恩恵を先祖
ゆうをわすれて
ねがひあげんと

おそろしき氣は
山と盛なれバ
大膳に至り
とも杯をあげて
じんにもなきもの
いわんとや

と思ひ定めの
世に在れば
又是非に
いかなる
ハ武服をしたり
まさに清運
の定を極
たまし有る
えんにも
ハ官職にて言
行だにも
旗の裏
君の国政に
みとられし

つぎへ

やとして それなき事 て浪士等 人の稀なる なるんば又 係る事を 罪なる事を揚 軍兵の政 る英国人 の不信虚 実をしらず 中国四国 地理のち けひきを

英ゆうのきようと 水魚の如く まもる者 幕府 公に よきかな 我信との 下知せよ

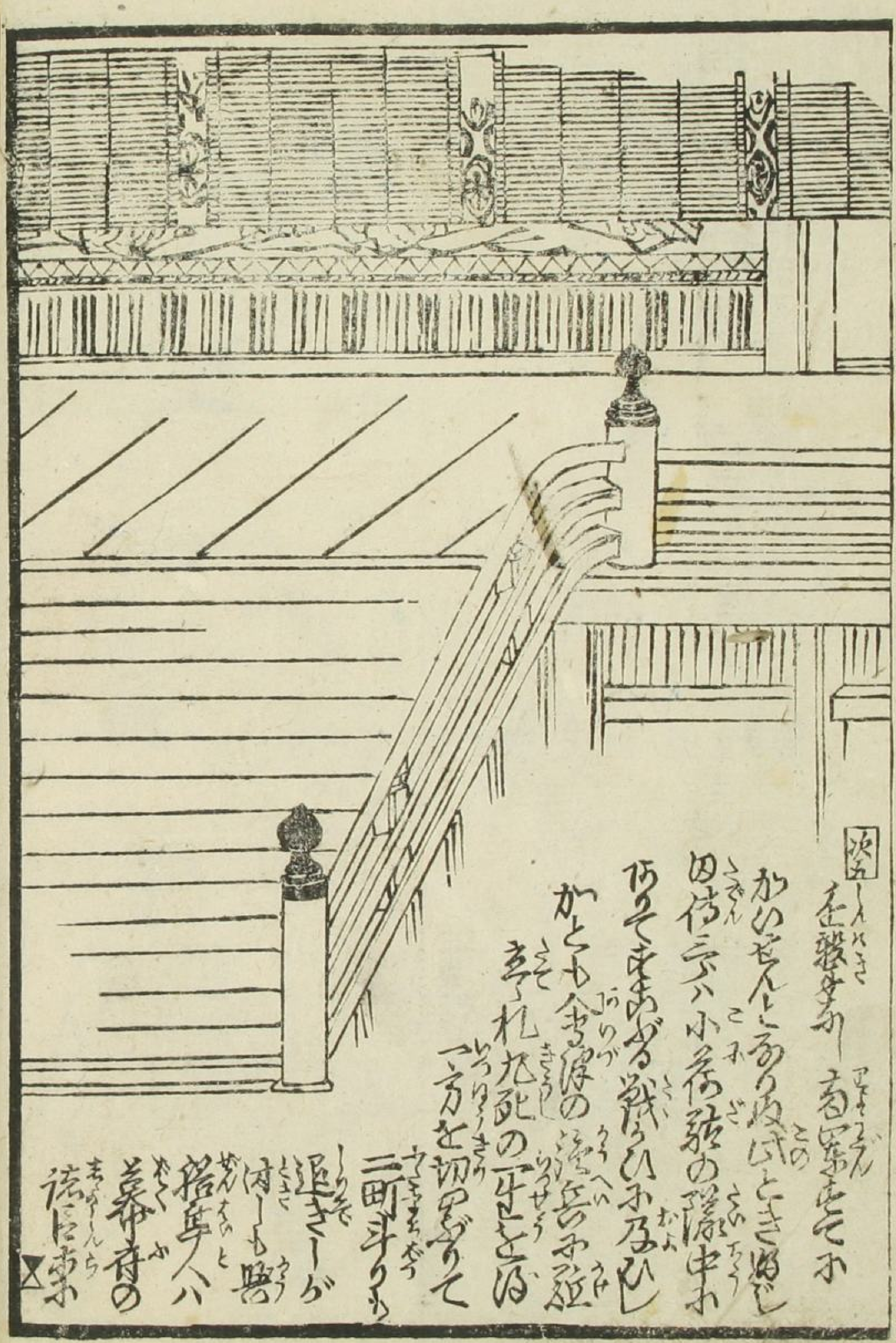
揚モ 人本 元利 利の良策 と成て大切 を成し

その商 ひふ その返答 年々 ちらみ よき

それと 国の恥を雪ぎし 文久三年五月中 旬同国赤間 関の海岸より 英船通行 待ける大 砲を発し 落花

大力なる 兵も戦ひ 英国も 和睦を 政府も 元利父子上京 とりなき

次へ



壬戦の年南宋高宗にて
かのせんしとあり役式とさき渡し
田信ニハ小高結の隠中に
所ニて其あかる戦ひに及ひし
かとも金の岳の流兵に従
其札九死の一生を得
一方を切ぬけて
二町斗りに
退きしが
時しも照
招兵ハ
幕府の
法に有

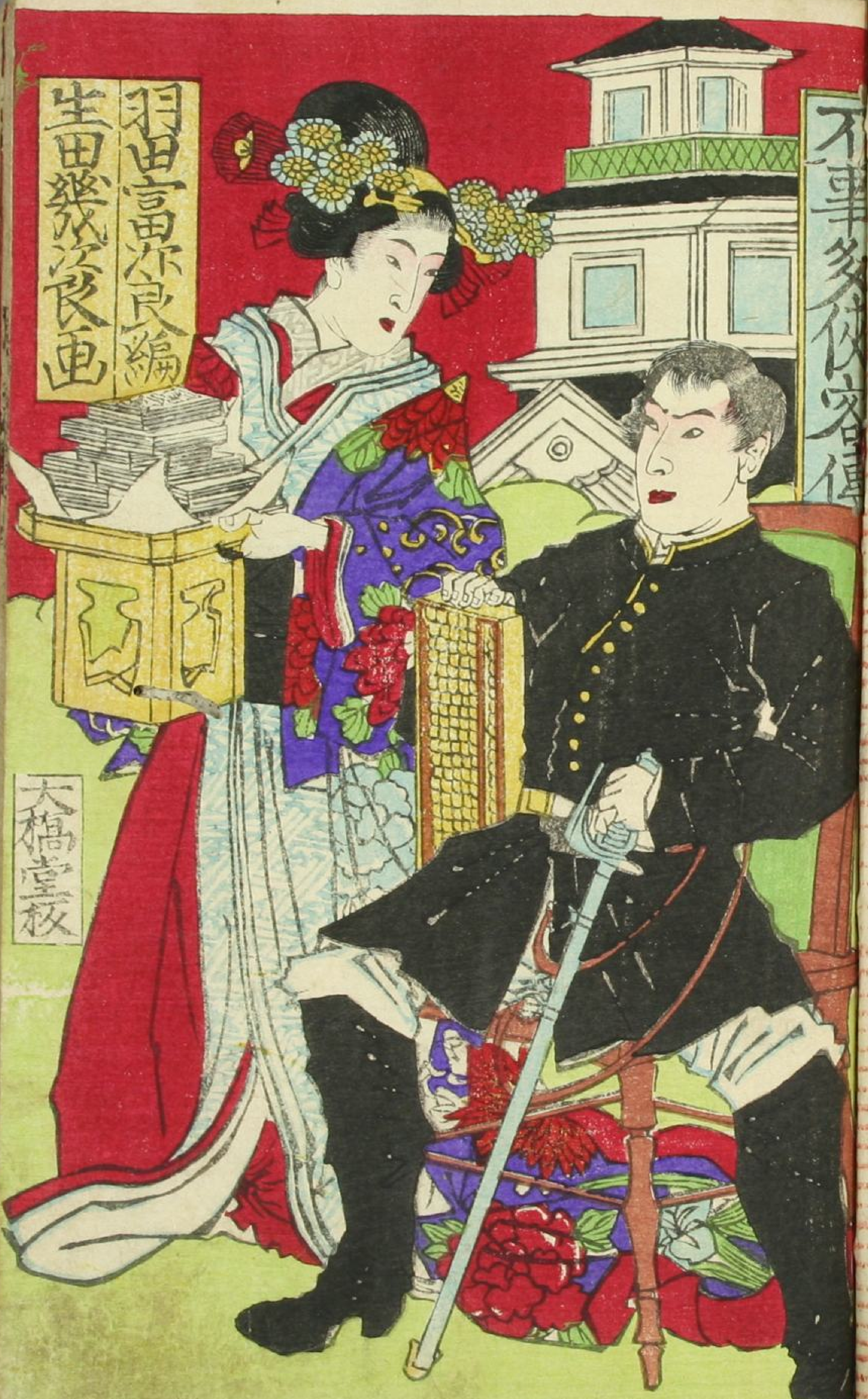
鳥周手にてに一令
何やう此院位ニハ着
悪の遁ぶるを敵
を切てあれバかかてに
てまでより兵人共に
退かんとる時一騎乱入
侍をかなの者抜討やれ

次へ

十三人を
仁恤を偏き

保寒ハあせど打れ出日より
一人旅僧の徒然中て来たりて
のきに臣してかうずんとして立ける折
彼がうそ首で我きてうる様子
の遠よりと我の此まき
まらいまそ去ると
ようぼうたるく
たる囲のよまとを
書アーしてゐりるが
石とびあるこをこうる
折傍ニふと面を見合

ぬひつき
やうけ人
あうく三ふが
一んの叢中
は土か地が
つきしく
天沖の四備
を分ヶ王
まなし



東京浅草區
浅草馬道一丁目
壹番地
大橋堂 児玉弥一板

者ハ侍アハ浪人とのまよひ人多り
ざきをなまぢにおひとすの武士
面を見合せ
くろよふ

君ハ名もあせし日本の折なさぞ
徒然にておかはせんげん参すらく
らせめ僕とりうき旅のゆひ取へとだゞ一人☒

☒訳まてなき
ゑんおよめ今より
きぐしくほ
たまわらば

☒温泉みなせしかれぬところ
元治のはじめ

七月下旬
宿地におひて
せんそうにてきうさ
おひ〳〵程団ゆめ
かぶんゆや再わつぼぞ庸に及び
ひそかに卒しさんとふに旅しをを
求めしが当日らけふ退くるなせし△

△折ふし
よふまぞ同せのかしときに
とひ幕ふのしふ
為れしとぞとくべしきてこそ中の梧とうの
君ハ手底にてとく良差におこき
れし僕とし君と同じき歳おままう
きうけたりとこ味ふ咄の面いかんハ
所遠さぬる和伏兄弟ぎの
縁ら合きとのあへ不も有まうさ☒

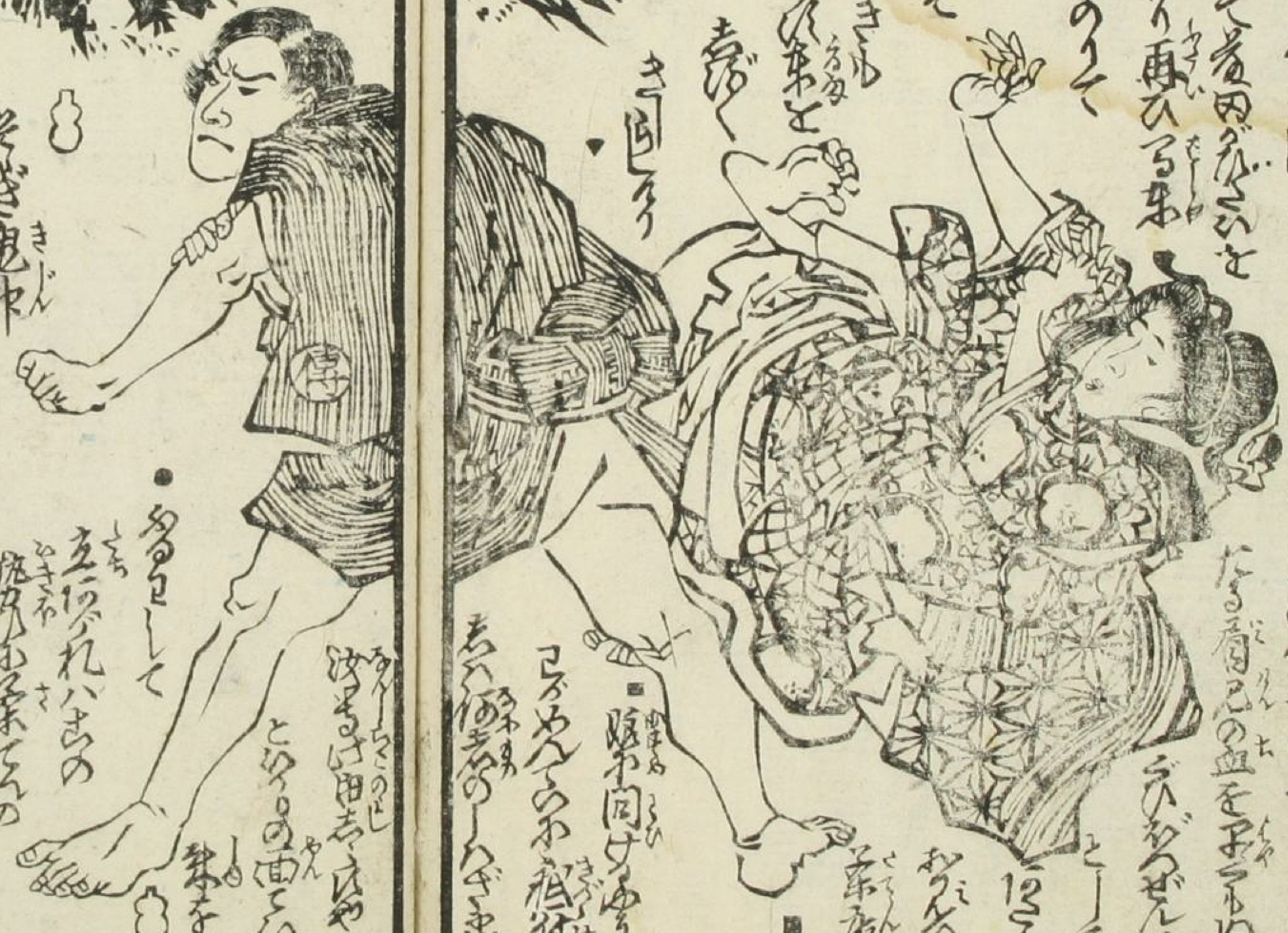
ちかれとふち人ふ
ほしついつきみし
侍ミてと申の
志そ又君のご家
名へと同れて
土佐国にて差で甚や

ドとん総易う持
入とむらむに
敵そうしかま
うらあくもつて
合を百明ると

もとは世の中の捨六
主君ある身なれども
より縁因のありて
仮名して
ば所に療
ぢのためか
未じみの其や
底とても全快を
あと支日かたのし
くんれうがせつなく
過ご遊び有
利をあせひゆ
を昭日かまく

こまんの行くしを
んるよりも侍三の
いまやさかおろ
已とのとにうち
かけがの藤兵衛
うかされど家ざ
の端より行ぢおち
そのまま我みを
おこしゆち
泥大のじか
足ね藤八へ彼三この
イン人張紙が禅学弟
乞ら八粋せしもらくや

きぬ発足さんと後の再会約して侍三ぶ別れんとするを藤八今ぞなごりわくや只とん僕とて小弟旭の今かよやかて大今大用やさば所かへ欲追ゐるぎいざやさろかわかさんとニ人は有るとれぞくほのかど程は同きそうきて藤のてんかて別るとさかくわけてれ其後二ころのちの我が其ば侍三八再び山の城下ゑと其人がら人へ食客なりしが與惣兵衛さ海るやいなせんおかやりてのとある藤八ば藤因は是を心中にくえ疎言不ゆりけとあちて游くれか酒会にまさり泥のごとくふらんまじて足元さぶまさまだ泥路を踏まして山口の町をまわれ其できころじがこくん家の下がけか



いつ個の官員志づ〳〵と
くるまを寄せてそゞろ近づく
停車でよくみるに
岩戸にてやゝ冷たし
後都育まのわんせん
おそたらひに心を痛し
たる志ん女高田清に
てありしがやゝ暫く派らかく
ゆり動かして目を
覚させとんおかんと ▼

▼ 志きりしが何の己ひそん
中の吾六旅に近く
はしるて高田がかほを
すとけの雨ひる事
やうちのりて
宮ごく
はしそぞ
うそき
左の事を
弱く
き回らう

▼ おゝとうじでひさう
いつ高田ハ顔をあまれきらうと
たちまち忽ぢ加が首やて返ひにけり
なる顔色の血を示さぬ
ぞいおがんと
として
ゆう
おかんの
華麗

■ 頭を向けゆう
己がめんてのお稼ぎ
其ハ何者のしんぎまや

🝣 そゞぎ鬼神
のごくの有る事に姫ハ
大ひに恐れを悶しておそれ
やよう今なん今のおゝに
存し君をまんるよりいち
ざわく左足を上げて
君が面への志てゝに
こそけりかゝときくより
高田ハ忽然とみんを●

● 多をとして
立ちつれハおの
挽きの小業でんの
姫ハきまとのまれん
後居のおかこけ
膝がを傍二ぶハ
何をかんぞはんぞん
泥のかけその有る
何ちるもる家太決
を切りるに上る
泥ちらん中の

泥まれまばけ由をはや
とびの面てへ
身を

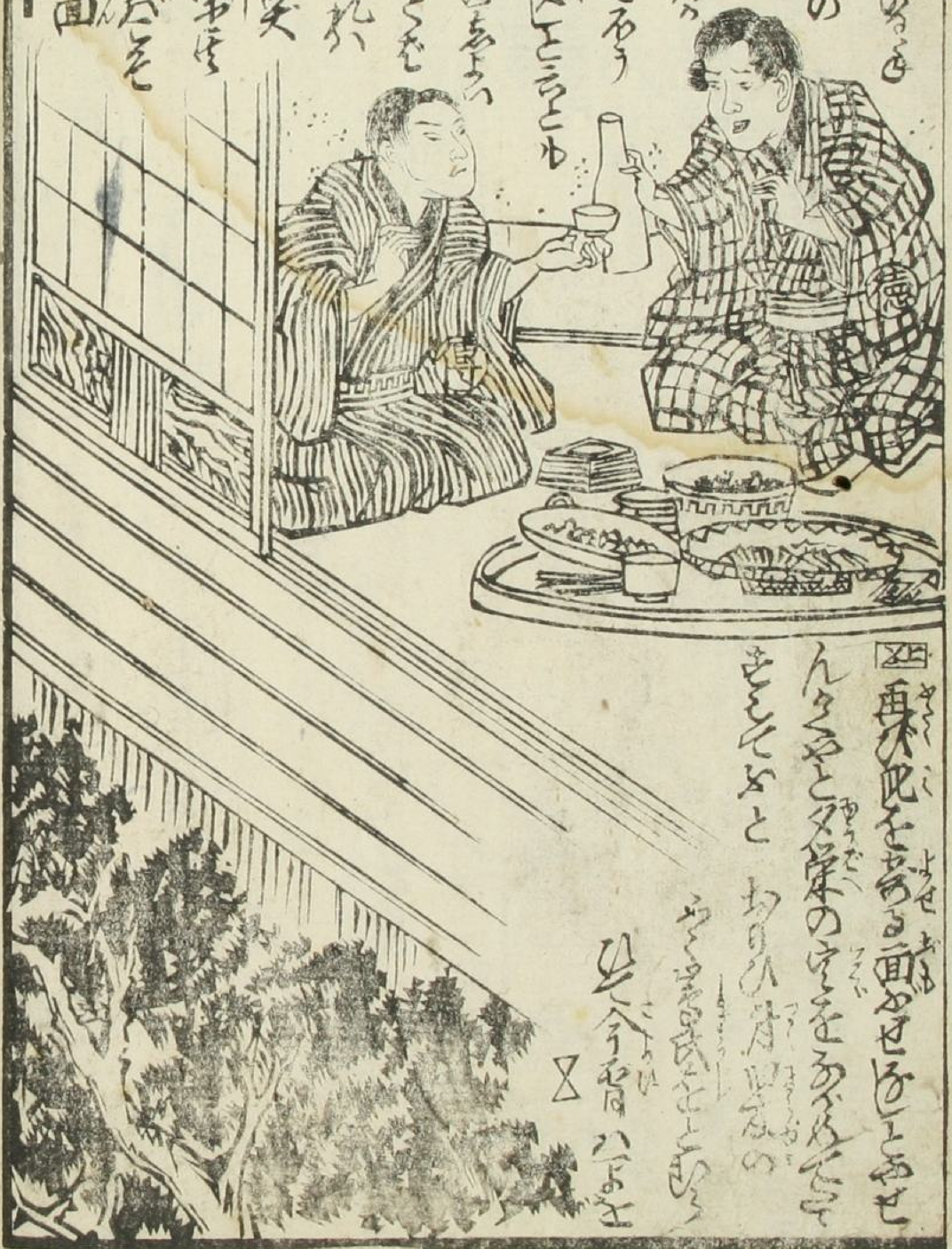
梧一君ハ跡より愛田が追きたるよもしらでそろそろ来りし
ゆゑ さすが車夫にばけさせのゆるがせにしてきたりし所
愛田ハ忍びて追つきしや の二人を先と暮とゞめ
梧一の先や僕が面前に廻りてつけたれしを
働くものあるらんと何者なれバよくを
その事共速に身をあの札と思ひねる
眼にも示すを見れバ古いゆゑにせんいぬる
此梧一君ハ温泉にゆきしけるまゝ
中の梧一愛田をみるよりからくと
うち笑ひ扨こそ愛田どの
君が病中日本に云
とかく

▲その事を何ぞ
足下にかくれバ
とうとうそれと
足を耕
あすに
行く

▲こゝなき僕何つく
まづへ七歩むこと大に別まして後ハ今
おとづれあるしがたしらば實にめぐり合
我が眼力の違ひもや諸事変じ海路
通ひよく書けり陸路に伏物まさにひとしき[下]

より
来る
何となく
曲
しんひ
思案を
そらさう
たる所
のまさに
度びと
きく
安全の愛田へ
もと
此に信せ候
おく
人ちから
にも
おとろへる

盗人のゆるさぬ 来助夫の 行ゑるそ うのうんおんの 枝をたよりて あかせが見とゞとけ 赤大夫の来よつ 前に進一とくも 深しく説れハ 中の心ますぞ とまさこ塗ぼ 其のたれバそ 再びだん面



さんぜと中の八丈来ま うつりぎ大然とうんを さぞ急きりふとさへ 中の涙を人のの涙を天なる 命令我落合れ 英士に行きの心くの 心と気る間苦に かる中のづのす図落ち わ一心より来方に 老といふ女ハ見ての 今の文章人が 宿所に知り儀れ

次カ

綸令かくよう紙来り
徒党武士官所に招き
第一の君ののぞみより
彦斉の出所が宿本へ傳へさ
通なりしハ仏布告を
そむく出所が罪あり
やどをおひもどり
届けをさせと家
本にわたし渡せバ徒
党ハ藩所へおくり
傳へれ
拘されバ手を
あまぬきてとく

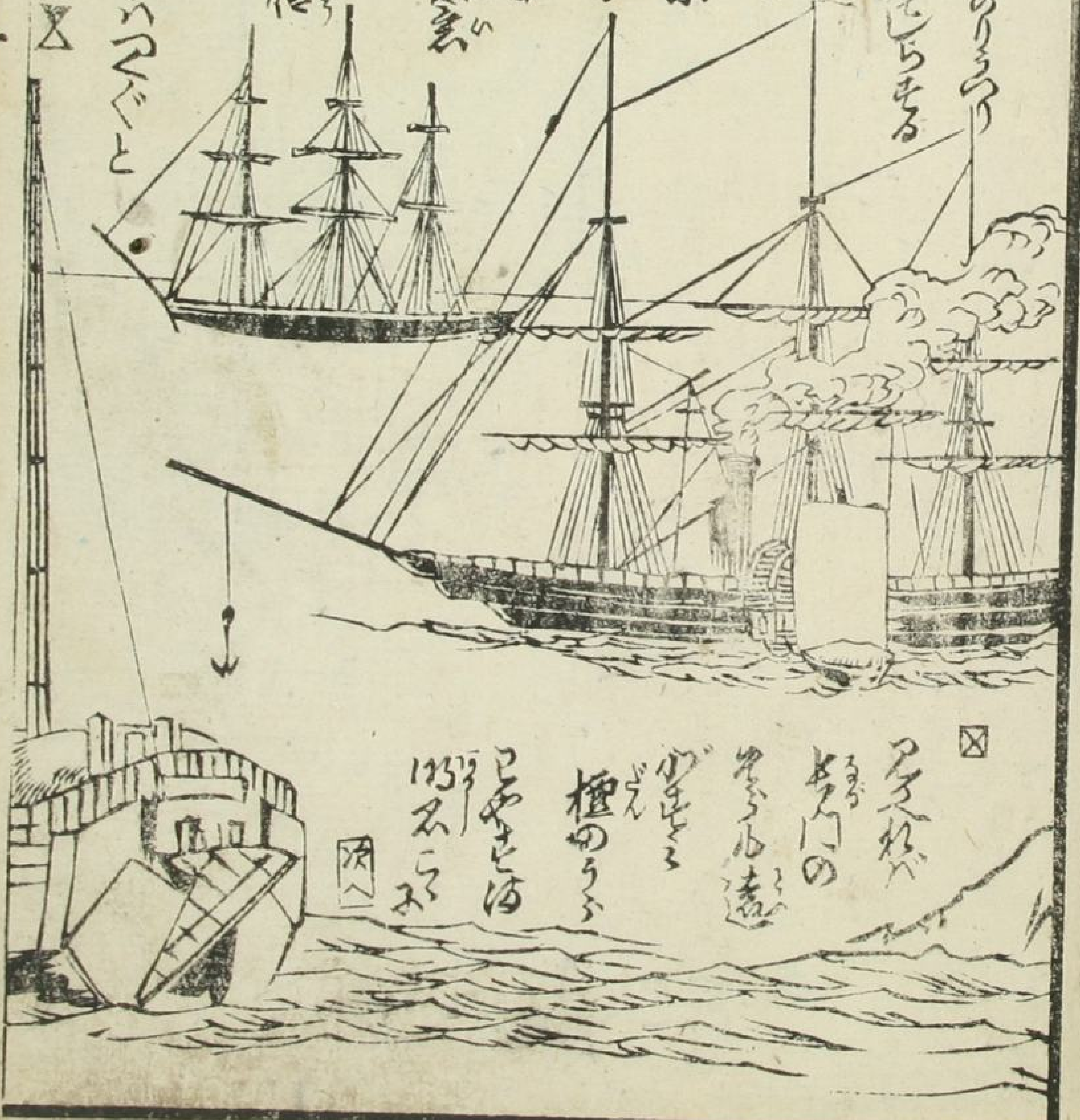
まんと
来そのの
のをバ
其時
とじまり
いろ
よふ
君立列の心ねおろハ
我家推挙仕りんばんと欠ハ安藤公のて本ひきしまの
者あるが今横濱お数奇大商店をひらきたる
山城屋和助という陸軍省御用をつとめぬ
僕れ久しくあんいて何れが君さまの為なれるが
之状をおくるべし是らわつけてみれ山大金を
つくりし共に通合いそこそくおくりんと思ひし ◪

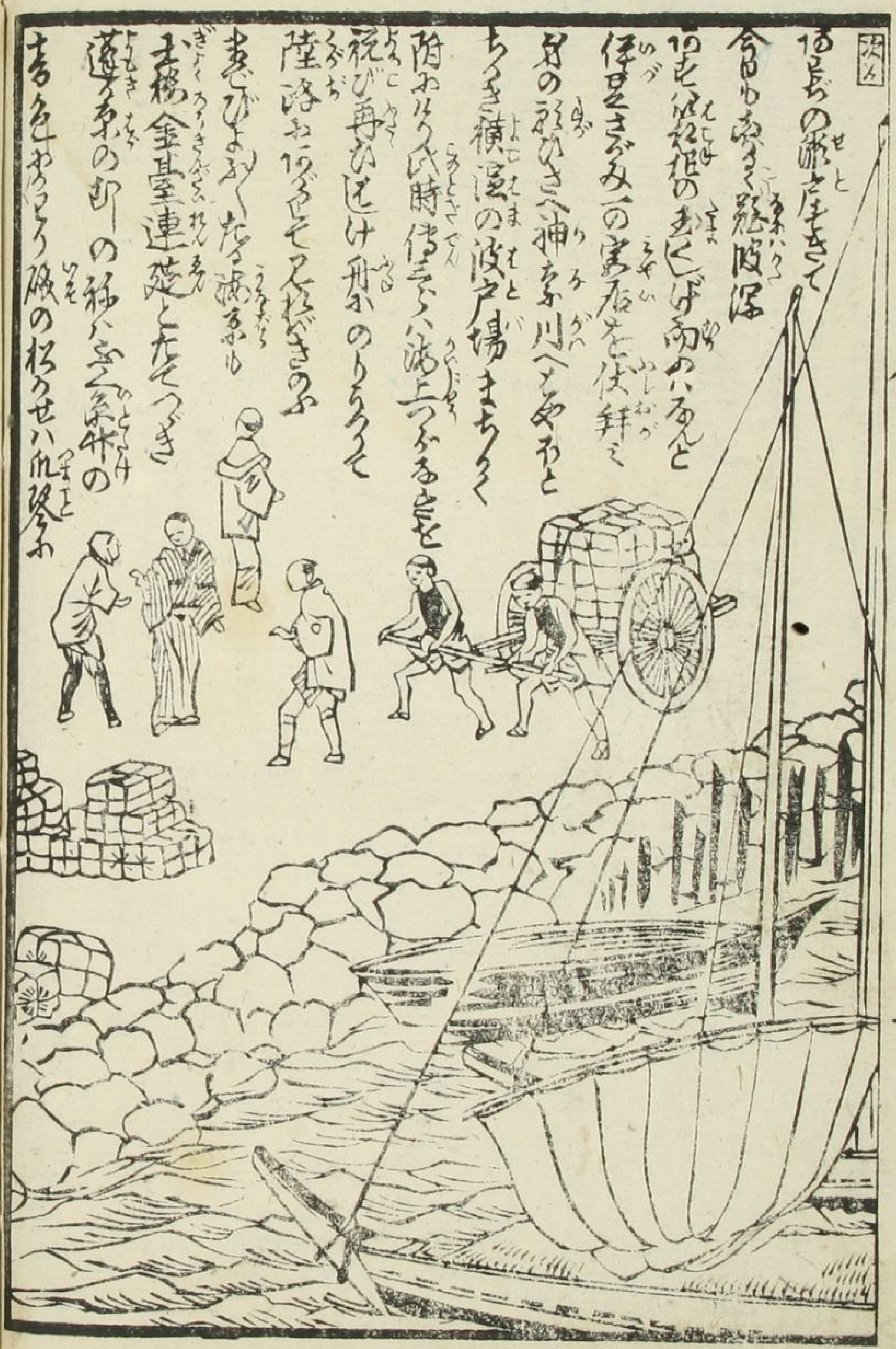
◪ようまする
きたら宮崎篤ハ徒党わたなさする
鉄中山一へてろきき傳ニてふりぎ殊
き殊其文ろらんの時まるやこにふ
丁数のかぎりなれば物語ハ次の五へんにゆづる

東京浅草区
浅草馬道三丁目
三十番地
一橋堂 児玉弥一郎

凡生に於ける志がありのまゝのひとや
あまあまく存在れ加て郎を乗水に
有しや空をうんと止れども付動を
いぐふにぶるまゝ浮けし開運の付るべし
双親おやぐるる受を信して存るを出て諸国
を遊れきたび家を離
年月重り開運の
時来るも徳をめぐるに
座をしる大家の身を紅
御を志る大成就とて
大度羽翅と旅の用意小太さ
ともひ徳を武ぶ仕を告る
路けの日山谷を三国廻り

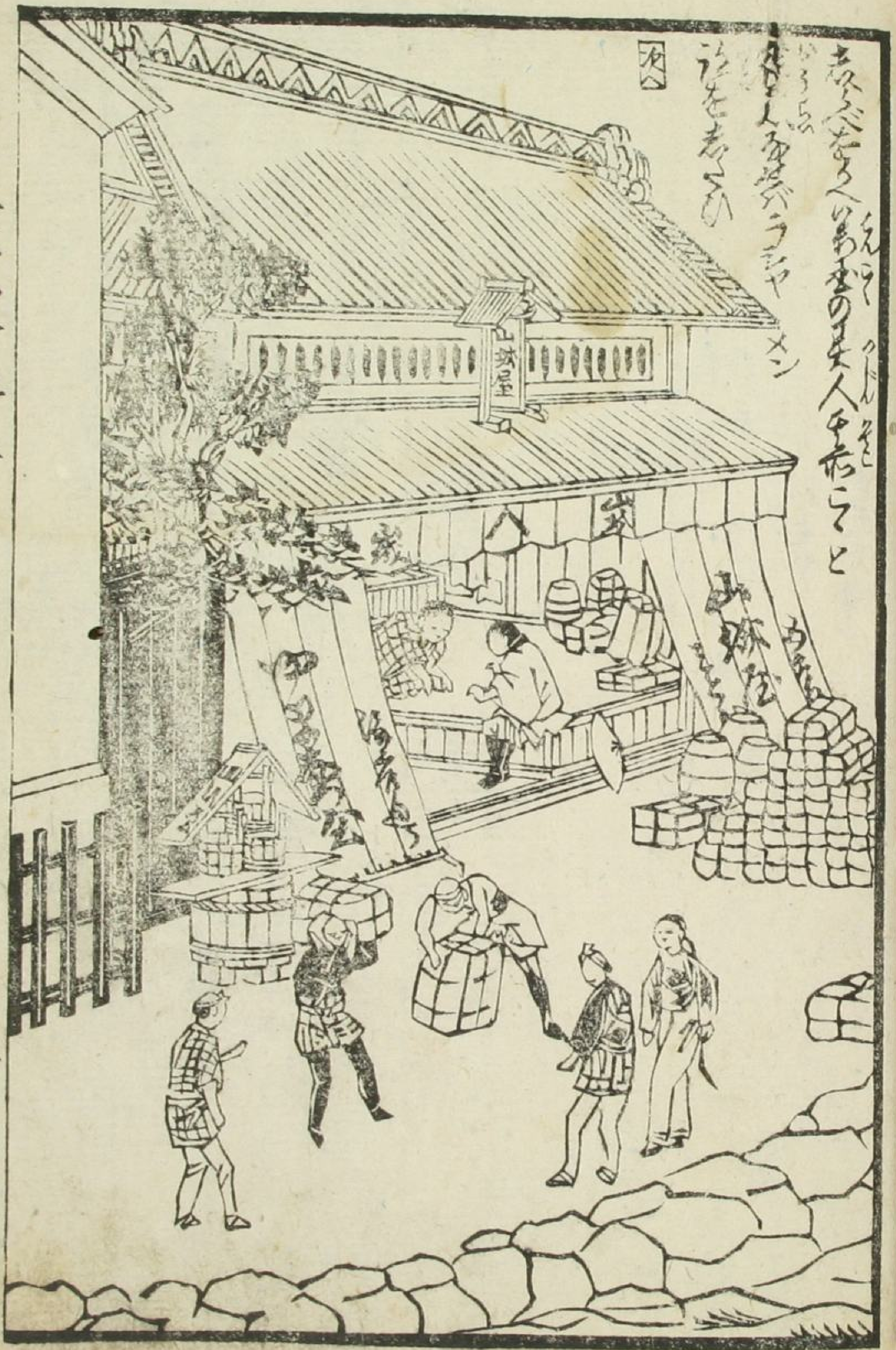
便舟を求め蒸気船に乗りのりつゝ
おきおひてとびつるときそむしらする
カラスせ海の水くゞて
うつれやかゆる人心年月到
深し年を云程までよみ
亦毎省人おりておもひても
仇とまし夫おひぬ昨日今日
友とするみおかぐし実意
きつくた徳を武の誹謗
これを思ひ人の上の人の情
厚意の霊性ハ新古の
差別なしぶりと信に至りつくと
人の心を押しあって喜然





次ゝ

はなしの瀬戸ときさて
今日も亦々難波潟
行し船場のあとにぞ雨のいたんと
伊賀きさみ一の実店を伏拝み
身の祈りさへ神奈川へとやれと
ちりさき横浜の波戸場まちうく
陪おりて此時傳三ハ陸上つらなるを
祝び再び延け舟にのりうつて
陸路ねこのぐりてそ天ぬきのふ
まづびよらく旅泊宿り
土積金堂連造とたてつづき
遠来の町の祈ハ気之外の
青色やうりう厩の松のせハ帆袋ふ



次へ

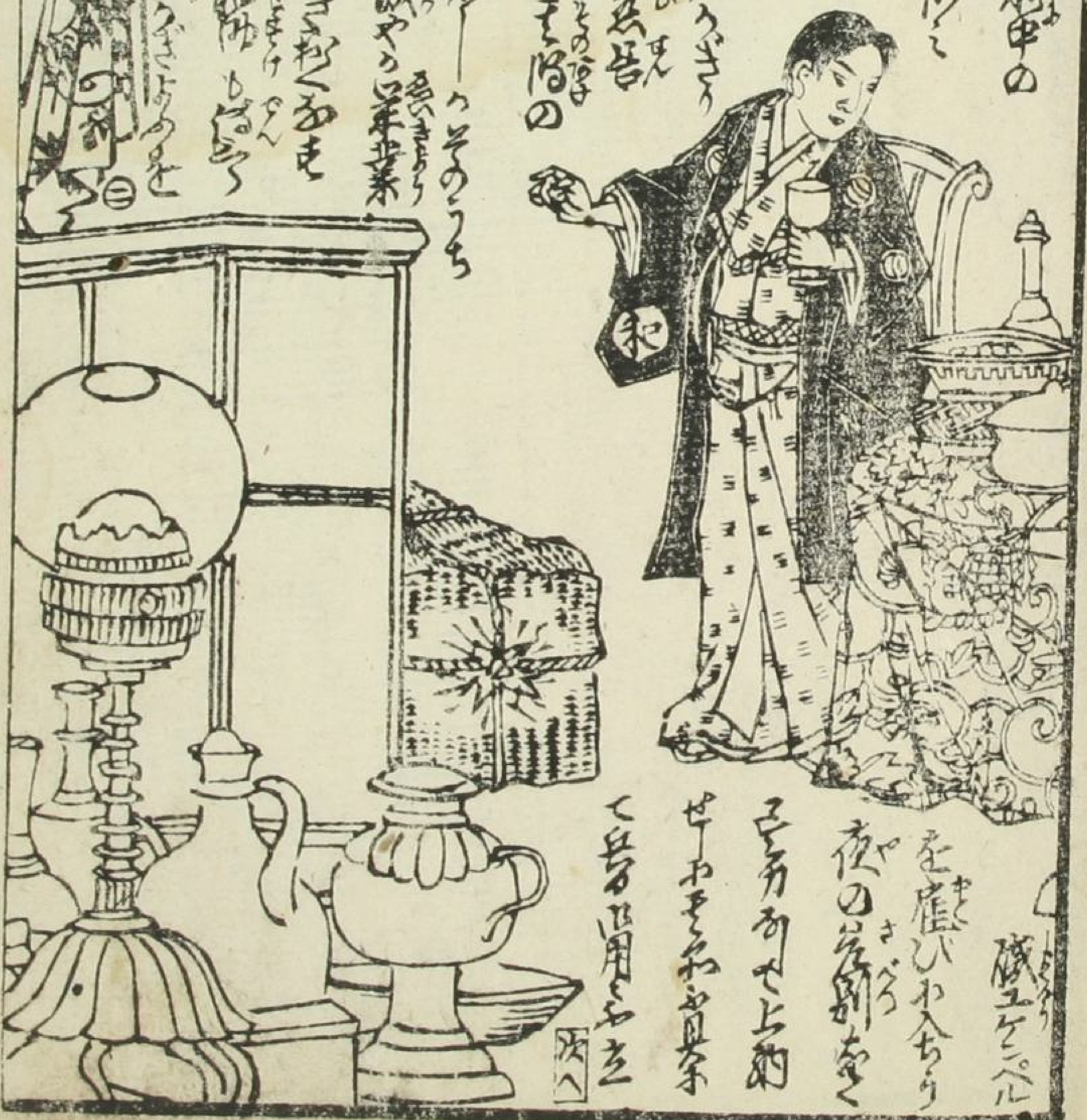
春くたそくへの都の美人千万にてと
凡て人形びラシヤメン
言を春くて

解語の花を粧ひし茶やの歡會に　㊂
おもの小金を欲せんとをちしや
人力ハ從横に走りて又おどろきろの
せんこを[illegible]かりきかん花のもとに
素ハ大事應ずを一開きあへ千金を
投うつとも其家田を保ち[illegible]とも
[illegible]皇の[illegible]花[illegible]我にのちふくるを
[illegible]中肥に[illegible]立身出世と
[illegible]ハ再びいさを面でぬけじと傳らへ
心ずち久しく大和國の所先に[illegible]くり
久の[illegible]消息を[illegible]世が
彼又おく[illegible]行くく白金宿[illegible]や
[illegible]ハ[illegible]出傳[illegible]おく[illegible]

おれせるおもちらやを
[illegible]勉強[illegible]
ひと[illegible]ねぶ[illegible]
支[illegible]ハ[illegible]り
[illegible]用先と[illegible]ハ切[illegible]

諸藏人[illegible]を
[illegible]ハ菱田ハ彼[illegible]の[illegible]
と[illegible]の評判よく一介[illegible]
かり[illegible]に山城や和助
ハ[illegible]陸軍省の[illegible]用を
達[illegible]より
[illegible]の[illegible]兵
靴を
御附
られ
[illegible]製造
[illegible]
[illegible]の

先[illegible]對面の[illegible]梅中の
[illegible]後又[illegible]
[illegible]
[illegible]陸[illegible]
[illegible]菱田ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]菱田ハ[illegible]の
日より[illegible]三日[illegible]
[illegible]山城や[illegible]
の[illegible]三日を[illegible]
[illegible]
[illegible]　㊁



藏エゲ[illegible]
を[illegible]入[illegible]
夜の[illegible]
[illegible]上納
[illegible]
[illegible]用[illegible]

次へ

世界に其名をあらはせしものなし
かくて其頃山城や和助
大いにおどろき
あらはせんと
たゞちに東京に
陸軍省より
其せつとふ
らひあるそ
よき生糸の此ほどにかはりし
金三十萬円をかりて
山城屋がなす返金上納
このことに露見なし是によりて
和助ハよく其事を困却せられけり

あゝ人の難を助けんとて其もとの
所の我ながら一方ならず起し今一方に
よしや世の中の意に臣人か
へらく我の他にも来りし
はかとよ其心の内をあかし
山和ハ此度大に其事を
もはや是まで
我心に覺悟
されは其事を賞し
義をなし
うち其あの頭知れ

それより和助ハ東京に及びて支那人并に西洋人の
商人共と交易を押すへき事をあつかひ
まだなかなかの事なれバ其ほど其せん其もの
三十五万円の金ハ其時の陸軍省へ
返納せしハ和助ハ我千辛万苦を
助けし恩を報ぜんとの事なり

のさんかしそ交易自由かなそうけいハ是れかの
じんと変りなし

交易をおこすと
盛んに日本の
紙たくさんの

[illegible]画

(前図) にぎやかんとぞ
きこゆ中にも[illegible]
われらバ上ハさん人
英人官諸官員
諸局の長と夫さい
をあつくそし外国の
大きなる人又ハ
役人を
別の店ニ
シ口ロとも
わずか[illegible]
を[illegible]
[illegible]

でんきが
きこじんへ
[illegible]のものあつかふ
[illegible]
それよりのちハ
あまさら
御山城やの
極みと
人ちまあひ
かげかひ
とひせんに
色つき[illegible]
五人このしてはらヲ

あまさる
自国ハ
わすりる
英ハロンドン
サンフランスコク
港と八支店を
かまへ我国
あらふ日本ハ是迄
太平おわぎ諸民
ゆうたか流れ相われ
大商人の[illegible]くあり
櫻ぬけ者の目をさましてやらんと
叔こそ家も[illegible]おもひおこせし

[illegible]
[illegible]
[illegible]仕へ
[illegible]和助ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]和助
[illegible]
[illegible]君へ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

横濱の地を
芳幾筆

東京浅草区
浅草馬道三十三条
壹番地
大橋堂　児玉弥七版

010190511370

東町
坂本屋
[illegible]